

# 久松の夜泣き松

豊前市の久松というところに「夜泣き松」と呼ばれる一本の松の老木がしげっておった。なぜこの松が「夜泣き松」と呼ばれるかというところ、それにはこんな話があったそうなの。

今もそうじゃが、子どもの「夜泣き」ほど親にとってつらいことはない。はらがへっているわけでもない、おむつがぬれているわけでもない。なのに夜中になると、とつぜん、大声で泣き出す子どもがある。親は、ひどい病気にでもかかっているんじゃないかと、おろおろするばかり。ところが、夜が明けると子どもはけろりとしておる。ほっと一安心するものの、心配でねむれなかった親の方は、夜たくたになつてしまふ。

さて、今日も真夜中、いつものように「夜泣き」が始まった。ねむい目をこすりながらようやく起き上がったおかみさんは、赤んぼうにおちちをやり、ぬれたおむつをかえてやった。しかし、赤んぼうは泣きやまない。おかみさんはとほうにくれてしもつた。こう每ばん起こされては、だんなさんもくたびれはてて明日の仕事に行けなくなつてしまふ。



心配しんぱいになったおかみさんは、赤んぼうをせ中におぶうと、だんなさんを起こさぬよう、そつと家いえをぬけ出した。

「ねんねんころりよ、おころりよ。」

泣きつづける赤んぼうをあやしなから、おかみさんも泣きたい気持ちきもちで真ま暗くらな夜道よみちをとぼとぼと歩きつづけた。どのくらい歩いたことじやろう。おかみさんは、大きな松の木のある観音堂かんのどうまで来ていた。ふと気がつくと、自分の子の泣き声ななきこゑの他にもう一つ、子どもの泣き声ななきこゑが聞こえる。

「はあてふしぎな、こんな真夜中にどこの子が泣いておるのかのう。あれも夜泣きの子じやろうか。」おかみさんが耳みみをすますと、なんとその声は見上げるほどの松のてっぺんから聞こえてくるではないか。さらにふしぎなことに、あれほどはげしく泣きさけんでいた赤んぼうが、その声を聞いているうちに、気持ちよさそうにすやすやとねむってしもうたんじや。

この話はさつそく村中に広ひろまった。松のみき（太ふといところ）が二本の大きなえだに分わかれておったので、おそろく、えだとえだがこすれて泣き声ななきこゑのような音おとを立てたんじやろうと言いうもんもおったが、おかみさんをかわいそうに思おもった松のれいが泣いてくれたにちがいないと言いい出すもんもおってな。大ひょうばんになつたんじや。

そして同おなじように「夜泣き」になやむ親がこの松の葉はを持もって帰かえり、それで子どもの体かたをさすってやると、ふしぎと子どもの夜泣きはやんで朝あさまでぐっすりとねるようになったそつじや。

こんなことがあってから、村人むらびとはこれを「夜泣き松」と呼よんで大たい切せつにしてきたが、ざんねんなことに数年前松食すうねんまつくい虫むしにやられてかれてしまい、今はかぶだけがのこつておるといふことじや。



伝・夜泣き松の切株

(末吉育子)